

## 被爆の記憶

原爆投下時 4 歳 10 か月で、私の住んでいた所は広島東部の熊野町という所でした。広島中心部からは 20 k m、呉から 15 k m ぐらいの所に住んでいたため、原爆投下直後の状況はわかりません。

当時、町長さんの息子さんが広島第一中学校に在学中で広島に寄宿しており、その息子さんを探すために、母に連れられて私は原爆投下後に広島に入り被爆しました（入市被爆です）。

広島に入った時には、一面が焼け野原になっていて、何もない状態でした。軍服を着た男性が一生懸命片づけをしている所を歩きまわし、おそらく爆心地の近くだったと思います。焼け野原だったので、山がものすごく近くに見えた印象があります。

身内の話をしますと、姉は広島の第一女学校に入学し、寄宿していました。戦争が激しくなったため、舎監から父に「トラックがあれば学校の重要書類と生徒を広島の八木（安佐南区）の修練道場に移したい」という話があったようです。私の実家は田舎の「ヨロズヤ」で日用雑貨、呉服、タバコ、塩、酒、精米、運送業を商っていました。トラックは軍に徴用され軍の仕事をしていました。父が軍と掛け合い、原爆投下 1 週間前に運びました。

姉はその引越し先で寄宿していたので、被爆には遇わなかったのですが、残った生徒は 1 年生だけで 233 名が犠牲になったようです。当日、校長先生は出張だったのですが、本校に寄り亡くなりました。その他教職員 20 名程犠牲になられたと聞いています。

当時、姉は 12 歳で一人では帰れないので、近所の方が寄宿舎の様子を見に行ってくれて、連れて帰ってきてくれました。広島市内は真っ暗でしたけど、死体を焼いたりしていたようで、臭いもしていたようです。昼だったら大変だったと言っていました。姉が帰ると、母は「あんた、生きてたんねー」と言い、母は姉の生存を既に諦めていたようでした。

姉は学校の 40 周年の会報で寄稿した時に、「残った人は、残って良かったというよりも生きていることに後ろめたさを感じている。」と文章に書いていました。

その姉も 2021 年 7 月に 88 歳で亡くなりました。その時 6 歳から 0 歳のひ孫がいました。命のリレーが繋がったのです。12 歳の時に亡くなっていたらと思うと、私は思わず姉の霊前に「良かったね」と言いました。

義理の兄は、当時広島の高専（現在の広島大学工学部）に在学中に被爆しました。探しに行った義母が被爆して収容されていた義兄を見つけました。義母によると、かなり膿が出たと言っていました。それで悪いものを全て出したのか、首、腕にヤケドは残ったものの、88 歳まで生きてくれました。

## 戦後の生活

GHQによる報道規制があったので、原爆被害の情報は入ってこなかったのですが、ただ生活は変わりました。私の父の弟は予科練から帰ってきました。その弟が帰ったら与える予定の朝鮮の土地も無くなりました。また、母の兄弟は朝鮮から引き揚げてきました。そこに農地改革など、いろいろなことがありまして、その対応や、税金が払えなくて「差し押さえ」もあり、家族（両親、0歳から12歳の子供5人）も多かったので、日々の生活も大変でした。

## 子どもたちに伝えたいこと

76年前原爆が落ちたという事実。その結果どのようなことが起きたのかを知ってほしいと思います。例えば、その年だけで広島で14万人、長崎で7万人が亡くなったという事実。現在、原爆は1万3000発程あるという現実を知ってください。いつも講話の最後に話すのですが、平和記念公園に「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませんから」とあります。これは、我々の責任でこのようなことを二度と起こさないようにしますから、安らかに眠ってくださいという意味です。そのような気持ちで広島に行った時には見てください。長崎もそうです。

また、核兵器を無くすることは、私たち大人が子どもや孫に残せる最大のプレゼントである。常にそういう気持ちで、核兵器廃絶を伝えたいと思っています。

核兵器を無くすには、まず話し合うこと。例えば、日本が真珠湾を攻撃して戦争が始まり、原爆を投下したことによって多くの人々を助けることができたというのが、多くのアメリカ人の意見だと思います。一方で、日本人は原爆を落とされ、「けしからん」という考えです。でも、両方事実なので、その上に立って、より良い平和な世界を作るにはどのようなことをこれから考えていくか、やはり一人一人が考える。そして、自分の意見を持つことによって、核兵器の無い世界ができるのではないかと思います。

最後に核兵器が人類と共存しないという事をしっかりと理解してほしいと思います。